



中村俊定文庫
文庫 18
746





八	日	○	三	二	一
春	春	春	骨	梅	柳
日	風	雨			<small>カ</small> 蛙
四	九	七	八	六	五
猫	春	春	椿	朧	霞
息	夜	月			<small>ニ</small> 汐
					土
△	廿	七	キ	工	
蝶	櫻	桃	雛	雲	楽
			子	雀	風



文化四丁卯年

歳旦

祥雪庵

よしの

はる

あけ

一

喜具

年

袴の袖

年心

母七酒の

せい

乃節の

掛

き

今

春典

太乙楼

不塞

去る年日や

か

畑 ちん 桃 十 歩

京 小 ちん 美 ちん 子

息

袖

あつた

小島

きりぎりすのうた
あつた

松風園

蘭尼

春無白糸

二

あけやははるまき

武蔵の里

東馬

白糸の目もろく山や松乃花

三

そらや雲よ志の

提二

そらや雲よ志の

二

あつた

楚友

六

あつた

二

あつた

提

□

あつた

提

□

春風ふさぎのまはる花さの上 全八日 秋幸

おのゝま乃井の井戸あり柳の宿 全七

まゝおひくはるる山 秋 完里

雨の宿を成ちる 全八

柳の宿を成ちる 全八 山朝

△

城二つよりせり日の目 全八

十くさの柳の宿 全八 崇英

一

柳の宿 全八

柳の宿

自口

宮れもゆのまの所 全八

まも柳の宿 全八

柳の宿 全八

柳の宿 全八

柳の宿 全八

柳の宿 全八

柳の宿 全八

柳の宿 全八

二

居けてこい斗を夜に驚く
あ日のこゝろに月を
生壁より古の集へ火焚き
和睡破るこゝろの猶許
月よけをせし放ちもまれ
をいふも木柱の形も
かけこもあはれをいふも
かゝるもくしとてあはれ
金是くゆきよ家のいぢり

心口心口心口心口心口心口

以て干ひし自ら二階より
吹す風のいづれを袖のけ
けりて中へ無乃うのま
産忽とてはなまてくハ酒の
おとと遣りて終のそと
遠年の時くよとて鼻月浪
東川よりと葉内乃厨
かゝるもくしとてあはれ
あはれよ勝るよの勝る

心口心口心口心口心口心口

たよしくは海へ難波のふきし
ふくまあふしく西所へ人橋
かづり男よけりまのなをへ
まつこまけししけふいり糸
邊^所のひるくま佳し枯をひ
らたしすふに連もよらし
せ乃たしく川へ依母のきん
まけしハ冬のはりおめし
まな林のからすもよる花の

口 心 全 口 全 心 口 心 口

人乃をふもまの川の口

口

まの思

- 三 小鏡を笑ふよふむ惚惚所 晴里
- 曲ふくま人の肩へ花一枝 ^會 彩
- 首やまの細く天まち 雪馬
- 大倉のまへに細くまの川
- 二 梅やまよるれ袴も手一合 座人
- 四 又び川舟まきしくしまの橋

四

秘授く魚橋を照す先系

雪江

七

杉屋もむらもれもこの月

逸者

たつるなれはは魚雲の雲か

逸者

二

ふ梅のうらやま〜む友三人

蘆玉

おしはかすう船乃きよは成り

蘆玉

信り〜人およあ〜二日巻

楚岸

徳川や老むらんのみさう〜

楚岸

敷とふそ〜おれは後日し

了補

伊豫の神の幣より〜

了補

大名上置れ〜〜〜〜〜現れ

桂菴具行

可明

け〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

梅を姉〜梅の〜〜〜〜〜

心

吉例乃は福川〜火を〜

心

大樹立の次〜〜〜〜〜

明

約束のな〜〜〜〜〜月

心

長乃娘白の姑孝何〜

心

五

すゝくちのきこふもたふと種はあ
今よきこふもたふと種はあ
藝形も書も世の年ひらふ
徳もかきこふのちやえ惟子
むらゝ温泉のまけはくしの包
彦龍をたをるを胆多しと種
松竹のきこふもたふと種はあ
流もあきさんあきぬの甘
流しは龍龍のまけはくしの包

心明心明心明心明全

美のあきこふもたふと種はあ
平のあきこふもたふと種はあ
美乃あきこふの中あきこふと種はあ
二日あきこふの中あきこふと種はあ
いつらあきこふの中あきこふと種はあ
やうあきこふの中あきこふと種はあ
雲あきこふの中あきこふと種はあ
いあきこふの中あきこふと種はあ
海あきこふの中あきこふと種はあ

心明心明心明心明全

多岐下より較すおまの滝層
一室も後には僅く成
新魚の皆心掛く地川流
晴くくくく林の天空
吾よかたかしくあそ待を待ふ
二里の山をよよと入る流
よよよの復葉かしく老ま好
ふふふのふふ唐の孫中
居くん由の傍りたまの七戸あ

明心明心明心明心明

高ら口の龍巻きくり
花くくく後も秋のまきく
おまきくくくくくく

全心全

喜典

みゆまや積のちめく急れあ 後指方 尺布
小中山八令よりくつて解き 全系 去留
むえくくくや新枝翠川くく
川中よりくくく余の井茂

△ 不丹の洛陽めくるまゝ全有東 利邨

□ 棧乃下子乃あつたまのせ

後一程眉根の書と絶上徳本納 但東

二 日のまゝに穢ぢり梅入る

別人やうりん一後の車道全 鶴友

丑 日の暮る山がころり全

維心やふらたふらト山 百歩

ニ ちの梅の外はそまき山後

人よんまゝ代も花より東峰

目の上まじり山河のまの境上徳本納 女 衣 嬌

能りおよき、あまハ於少の

羽々々地やまの孔細なる武ニノ守 定 雅

あゝあゝあゝあゝお小曲 素 兄

くくくくの者あゝあゝあゝ

一 暮られく大うううう古柳

二 暮上梅くわううまゝ武小川 柳下連 燕 芝

二 暮や暮乃いん人武小川

○ 解二日とあてなうくはよの雨 其約
 一 欲をいふあゝ〜 持てる柳が
 一 子を柳にあらんせぬ。あひま
 カ 不あらしららけむせよ 呼哇
 一 蘇るは江戸の二月入て海
 口 弊利いふ心算をやくはは
 二 解をいしなむあは梅のこ 如雪
 ● 小曾麻の然つ〜 ちやまのあ 晩成
 ○ 妻雨や遠空の毛麻を似せし

湯をくや炭捨く妻の膝の髪
 三 くらゐのうのうや 響よおの月 打睡
 二 吹とよまの清ハ自よおのむえ
 二 去〜妻あよの月まし山のきれ 観魚
 一 海元の亮きうねてまらむ乃川
 一 梅〜や瓦焼く〜 枕もと 山右
 一 ぼん〜の〜日のゆ〜 階やまをを
 一 花い〜き〜 淵のみ 船もあはるを
 一 一〜の〜 柳よ 木のはなも 素琴
 一 一〜の〜 柳よ 木のはなも 素琴

一 花夕
 二 可耕
 三 切草を捨つて遊ぶ女子

一 下宿高の 子夫
 二 時曉
 三 秋夕

一 秋夕
 二 行雨
 三 行雨
 四 行雨
 五 行雨
 六 行雨
 七 行雨

長き声に羽の音やまぬ 浦放政 存井

春の枝や長偏やういねる 石 石

春の枝や長偏やういねる 石 石

春の枝や長偏やういねる 石 石

春の枝や長偏やういねる 石 石

春の枝や長偏やういねる 石 石

春の枝や長偏やういねる 石 石

春の枝や長偏やういねる 石 石

九

春の枝や長偏やういねる 石 石

春の枝や長偏やういねる 石 石

春の枝や長偏やういねる 石 石

春の枝や長偏やういねる 石 石

春の枝や長偏やういねる 石 石

春の枝や長偏やういねる 石 石

春の枝や長偏やういねる 石 石

春の枝や長偏やういねる 石 石

春の枝や長偏やういねる 石 石

春の枝や長偏やういねる 石 石

春の枝や長偏やういねる 石 石

春の枝や長偏やういねる 石 石

春の枝や長偏やういねる 石 石

春の枝や長偏やういねる 石 石

春の枝や長偏やういねる 石 石

春の枝や長偏やういねる 石 石

と柳の纏ちぢ一いち友と連つらひひぢぢ 中泉子こ方かた

後尾亭書

沈しん々さややははききのの使しのの帰かりり 尺布
ままもも大だい桶づくのの拵ぢぢひひ志しのの厚あき 片心
ままもも大だい桶づく乃の枝え川がわのの厚あき 之厚
みみゆゆのの拵ぢぢけけ 多玉拵般
又また六むのの枝え川がわ乃の厚あき 月のの門かど
ままもも大だい桶づく乃の枝え川がわのの厚あき 月のの門かど

中ちゆう々さややははききのの使しのの帰かりり 尺布
ままもも大だい桶づくのの拵ぢぢひひ志しのの厚あき 片心
ままもも大だい桶づく乃の枝え川がわのの厚あき 之厚
みみゆゆのの拵ぢぢけけ 多玉拵般
又また六むのの枝え川がわ乃の厚あき 月のの門かど
ままもも大だい桶づく乃の枝え川がわのの厚あき 月のの門かど

厚心布 厚心布 厚心布 厚心布

之修さるる世代の月
死の存の命の幸い
素も跡も 知る 眠
名 遺教も皆阿のやぶ斗
夷地さるるを思作
井の中の細の端も有る不
ひく物もきこさの昔々表
付たあそぬ又よえくれ
社にちねるる鶴の雪鳴

布 心 厚 布 心 厚 布 心 布

之の修さるる世代の月
死の存の命の幸い
素も跡も 知る 眠
名 遺教も皆阿のやぶ斗
夷地さるるを思作
井の中の細の端も有る不
ひく物もきこさの昔々表
付たあそぬ又よえくれ
社にちねるる鶴の雪鳴

厚 心 布 厚 心 全 心 全 布 全

ひしつるまゝの雨
野集りし山の雲も七日
成らぬ條乃明神を祈す
厚心厚

喜典

下徳宮深不
柳下連

二 八
相の玉井の地入る日わらふ
去乃のやれく戻るやうに
香成中より外より梅入之
芽成りて株なる真一柳の中
隣江
桂浦

三 土
柳の風や柳をよる梅をよる
そよむかおるはいふかおる
二日名、葉の噂も柳の風
春の川言や入る所よる所
諸月

たぬきの火や雨えりてもよる
春の海もよる梅の日に
又春よる見よる梅よ成る
礎の位老はあけりけし
龜表
素牛

五

神楽二里のぼりゆき後合會の柳下充術全連斗水

七

柳吹やまの中なる走り大、

六

六十の身も親も二日を、
文枝

五

さほりせし神もくまの傀儡師、
桑古

四

後乃香やうらみの考、橋の舟、

三

つきとつる月もやあもあまの内、
一塘

二

とく風やせし先ハ連ひ舟、

一

捨香の橋不同やあまの月、
行笠

キ

ぬがしあまの多きを妻の所、

イ

かきこみ月、死も短の妻、
梅後

エ

播磨やまはな、歌かよ馬の子、

ウ

福川のねるふ、つらみ、
卓種

ス

山乃名も水は流れる、
三来

セ

安うらせし、正月も唐人、

シ

本道よはまの、信意あ、妻は、
歩月

チ

福也やせし、昔とあ、
、

リ

ゆるらく人少お、
、

ニ

、

之

奉修練不動明王祕法武運長久祈所

二 梅子 少くも 梅子 実なる

毎日のついでを 睦月

中より や 梅 花 枝 多 春 菜

八 梅 花 多 梅 山

五 梅 花 多 梅 山 女 本 毎

梅 花 多 梅 山 女 本 毎

二 梅 花 多 梅 山 女 本 毎

六 梅 花 多 梅 山 女 本 毎

梅 花 多 梅 山 女 本 毎

梅 花 多 梅 山 女 本 毎

梅 花 多 梅 山 女 本 毎

梅 花 多 梅 山 女 本 毎

二 梅 花 多 梅 山 女 本 毎

梅 花 多 梅 山 女 本 毎

梅 花 多 梅 山 女 本 毎

梅 花 多 梅 山 女 本 毎

△ 梅 花 多 梅 山 女 本 毎

梅 花 多 梅 山 女 本 毎

霹靂菴魚行

さし肩よかしく樹屋柳か
斜よかまじ瑞のあうり
又さし離の瑞数さし
笑む上戸の九献をのく
去る尾の碧女附し帯のえ
ふさしく小やゆの冬あふ
^ワ 悲移く新瑞の山入葉枝

午心

心沙全心全沙

秋よむ娘くや古んささ
熱杖の并居し雲松の上
あゝ熱く船のさみまを
秋風も渡季の世よハ吹あつ
冠あはれさし討ち評定
まゝあぬハ三丑の月も流る
後雨よなま育れし梅
とまよしはらるる墓石はよ
日あふ仕くまなやき

沙心沙心沙心沙心

玄入り信も一樹乃る云ふ事
穴也其地と先きを船籠
名 残前良き事とてをよめて
投し〜〜〜茶の池
枯て待たも子戸乃事山
去〜遠かえ〜事仕有
為い女成人よん〜と準
〜〜〜西の山
足海の事〜事

心 心 心 心 心 心 心

城、あ〜あ、犬つけを
大いなる魚の骨、大砂
看らら、大〜大、大〜大
降、大〜大、大〜大
火事、大〜大、大〜大
是、大〜大、大〜大
大〜大、大〜大、大〜大
大〜大、大〜大、大〜大
大〜大、大〜大、大〜大
大〜大、大〜大、大〜大

心 心 心 心 心 心 心

山を度り花をよみ海のを感ず
をの所一乃掉り海をさ

心 少

美典

海少も数よ入んや七名菜
月代や海をのちを海の上
ほろろや子鹿をとり大茂
花をよみ海をよみ海をよみ
る月の海をよみ海をよみ

都 梁
年 选

下迄古の
柳下連

鶴 冲

海のそらを吹く海をよみ
世乃海も海をよみ海をよみ
海風よその月代大也
門をよみ海をよみ海をよみ
其のよや海をよみ海をよみ
其のつり川けは梅ちる梅ちる
弓持しむる梅ちる梅ちる
海をよみ海をよみ海をよみ
海をよみ海をよみ海をよみ

分 年
年 眠
素 相
雨 交

七

ニ

八

葎滴舎無行

此殿の梅階へく 葎滴舎無行
 まこと清くけしめ 葎滴舎無行
 白壁の苑あり方より 葎滴舎無行
 夕月の穂乃かきし 葎滴舎無行
 四十と見えしより 葎滴舎無行
 葎滴舎無行の葎滴舎無行

心
 雨
 素
 成
 成
 成
 成
 成

心 成 文 相 心 成 心

心をあつたてて 葎滴舎無行
 ふとくくく 葎滴舎無行
 子成 葎滴舎無行
 松灯乃落し 葎滴舎無行
 葎滴舎無行の心 葎滴舎無行
 葎滴舎無行の心 葎滴舎無行
 仕切ありき 葎滴舎無行
 心 葎滴舎無行
 あんふ息子ハ 葎滴舎無行

心 成 文 相 心 成 心

月をよらふもよらふも人の上
二見よらふ初日とある
^名そふ地連乃よりあはれ
又捕降よらふきふのせや
海書の船ふがふもふ
傳位牌乃ととと姑
怪ふあふのふをれの競ふ
あふあふあふあふあふ
二三日競出をふあふ半合相

成心相成交相心交成

祿ふふふふふ大衆々状
短ふふふお海入ふもふと
月とあふふふあふのあふ
ふふふふふのあふあふのあふ
あふふふふふふふふふ
あふふふふふふふふふ
地獄へあふふふふふふ
ふふふふふふふふふふ
すふふふふふふふふふ

交成心相成交相心交

十一

梅すくも人上昇せて花壓斗
之も時正の面能成る日
相心

春魚
考江牛坂
柳下連

八二
梅ちよや梅ふくらみの色
かきあすな松のこころは梅水
菊雅

廿七
押所よひましくゆや若の角
柳あや葉あふ魚の鼻をくら
今朝も梅めくもおめく
た文

廿八
びしり航るまよも海をく水
大空は舟よさくめく春日ぬ
夕梅もあさく風もたうる気
知水

二
梅もやまの深き時月士
ち海くし思のくまぬや莖州
柳下連
考江牛山

二
松風乃底ふし成て初日く梅
人めくく古後のく見ま〜次
考江牛の海黄の思や層ま〜
大瓢

考江牛

△

吾子故郷の舞や走馬曲
 笑うゝまよふ集との規亮 南忌
 乃の休や船よす布餅折陣
 自ら打てよる友多し松の梅 全巻 古道
 是まきり成撰の欲の梅種小
 雪の声々厭物よよし山 全十日市場連 后雨
 山くゞ舟くづ障人まの雨
 峯戸川ふふ流くゞ梅日私
 舟所々柳もききひ朝の月 至山

三

鳥原くゞて雪のまき高小 百馬

一

新ふくゞ田久隈よ夕柳

二

浮城の終も急な妻ありわ 其雪

八

残ひまよま姑の垣や葛 榎 不川改 雅律

キ

きし鳴や門あきまよ替り古

一

二三乃まよゆへハ梅り小 路水

九

まはのねや人し別まよ鳴終

焼由昔や火地成中に山登 魚児

柳よる田の行よま里くゞるま

夕暮や柳より日も古画のまほ 後倉内 既白

板垣より物さして何ぞ柳木 柳下連

中実より人魚を遊ばぬ 秋 午戌

みずきと成るこそく外をまよ 秋

高船の歌より高より舟木 秋 都良

伊丹より鶯よりくまを柳 秋

石見よりとせしは柳の戸口外 秋 午雪

四回七言柳より高より叶まら 秋

多歌の柳垣よはしをまらぬ 巨井

まほ柳や歌のくはる金井戸

琴平より鳴く柳の歌へ 音牛

新島より歌より海へ 民の家

畑打やまのいれ充て松を人 柳下連

姉控より世の業もあつて 上巻下巻

香乃乃とていハミ 秋 午友

栄の柳より高の柳より 秋

一 ち柳のこころぬきまきうらむと 全 吐舌

三 言や漆とてあつた本は雪の目 巨尻子 牛翠

〇 まはるおの清よまのつらり 全 柳翠

△ 廿 ぬきまきうらむと柳のこころ 全 柳翠

あはれもくもく草とて 全 柳翠

人乃るをうらむと女小 全 柳志

まのそとくもくもく 全 柳志

三 言や漆とてあつた本は雪の目 全 柳志

〇 カ 吟嘘とてぬきまの清よま 全 柳志

一 春乃雨系乃女小 全 柳志

一 形もあつた清乃柳志の 全 柳志

一 清乃やん 全 柳志

一 顔の 全 柳志

一 七 妻乃月 全 柳志

一 人 全 柳志

△ 一 顔 全 柳志

草花 全 柳志

八 喜洲あつて廊へ椿の好 一 景

キ 新所くやうもるる三上山 吾醒

口 春風や作よ 女 了元

二 五 河もわくまは上座の所風 友干

一 考梅や山おのまはさう 系 凡仲

中こわじせふき義也の流 宣風

煙乃ものま令よ嫁つもと 在魯

うくまよ繁を叫れくわ 子光

由依清くま世の舞をねん 舞音郎

自刻の月色津へぼくめく 末船

三右扱乃義も遊やまし時の上 岑高

数賀へ京の交あ妓吹ふ秋 律石

おとせきかひはては春八景のぼく

力 〇 二 二 二 二
 月影やふも月影夜、ゆき 京 素林
 浮草はらふにふくけり煙水 十壺
 松垣よまきささこきし雪の雨 体羽
 妻ふふの二刺蓮人く梅の意 兔角
 妻乃時中田乃妻の二三寸 子桂
 浮草やいほささくささる花 百磨
 山のまろむお原下梅のふささ 在京 在貫
 老寝まよまけて歎かきまの月 在京 六曹
 夜と皆月の影にゆき 在京 樂只

小菟子集

夕かき三井寺洋おひり 雨陰
 瓊花を存つてさ乃山古 平心
 學妓のまろむも松の葉がれふ 升古
 老まろ後戸のりあてあさ 松吹
 名々の月らんまろむをあた 完来
 蘇もまろ坊をらむいふあさ 陰
 入るる座もまろむ杖塔を 菴雅
 竹まろ響をまろむ泥龜 古

母も物つらむはこゝろにやじ
後より提むる衣く乃般
何れか室の八山入るまの
代り種ももさのま石
小石を此業いさぬ泊りけ
大もやとこす一昨日の飯
虎の毛を院ハ勅使の飯飯
んあつた喜を室まを白面
目もひの田上樹も氣磨

改

心 来 欣 牛 心 古 心 欣 心

傳乃人もまゝなるの識
^名 治産の何きくま海子門ちる
もふ根じくく兎五刻
挿る目も何しよまの力つき
三つをひいて何ぞ 挿り
まおよふふを佛もまを佛り
しくも根のりんくもあ
百姓のひくも氣も不屋信
せんもいとて睡む係父婿

古 来 欣 心 古 心 来 心 雅

落戸の中よりるる約るぬ
お徳深き風吹る月
は林も命よりよ幣一役
光のあつははふ路より
結織乃切者よ如し和加減
るの嬌々たここ境実
お金乃清業あまはる書の門
あはるくあまき一還幸の流
いづ一あまもあまらぬ花の時

牛 吹 来 牛 雅 唯 吹 古 来

非しあよ 転成をるる吉日

純 筆

梅のあま柳の産よこりぬ
あまのあまのあまのあまのあま
柳下

柳下
女落産連

二 我よりあまはるる
何れもあまのあまのあまのあま
二 後よりあまのあまのあまのあま
三 日おあまのあまのあまのあま
はるるあまのあまのあまのあま

獲車
湖遊
麦序

ニ

香よらねる人成けしむ林
終くしむ人よ古殿

蕭旦

キ

酒や二月のちかき酒に
とくしむ人や夫の姓

連車

一

るの難ふ事とすくく
却てやまき言ふ柳原

竹亭

ニ

おらふの酒や松のまげ
まじりし酒はぬる梅屋

祇孝

虎宮連

ニ

人別くはあしむ酒の梅
妻はや世まじりけふ肉は

花負

ニ

あまのしむる月影はゆき
梅屋もあまの酒とすおれ

吾言

三

そやうもあまの酒とす
の月影の白く清く浦の梅

夢水

〇

まふやうもあまの酒とす
梅屋を想ふのやうはゆき

鳥孝

シ

りんのしむる月影の白く
あまの酒とす

斯弘

一 青柳よまを味よくはく籠水
神の居るに地もあつた
燕や旭の破乃浮生糸
素友

行徳の連

一 官邸の書何の柳の序
一 我
二 杭のよ花かまうるに解川
一 我

一 妻のよ曲よくよ靴おろ
一 荻桂
二 船乗のよ時やんはの雪
一 柘
三 七よのや砂よ物さうら

一 はのよを平にまて挿入
一 呂山
二 ひのよに社やあめの子を
一 紅二

二 ぬけのよに社やあめの子を
一 紅二
三 信もるや陸もるやあめの子

柳下連

二 是所のあめやめやまのよ
一 布穀
三 貴もるよまもるよあめの子
一 為蝶
四 去る梅やひ梅あめの子

○ ままの海に沈む月おそ
 尾種酒よまゐりの美上戸ら
 折るや女のしほと破あつそ
 玉のにおや昔のいふ水の名
 夕煙をさ筆のくろくの形
 月をみやして思ふはし日の煙
 一つ人さるつ出さるゝふまの火
 世のまや古くうたはれたるま
 不二とまむはまのまをしまの夕

、 雪鏡
 、 傾雅
 、 若原
 、 怨

お梅を思ふ

人々(能書もく) 春の宿
 誓由心ろろりあま乃お記
 存るあは清あのみこも思ひ
 ころよ梅より娘は乃たなく
 日せしは縁をくちのあやう
 うも炉は火つけてまよおを
 朝あまの船板多く梅の香
 掬む古き寺下乃市

、 心
 、 来
 、 心
 、 来
 、 心
 、 来

完来

禱し年出逢のすはけ
こころを癒さるる地信
調合のちよきまきま
少誠すはけのまよき
まよきまきまきま
今この盤面のみよ
懐かしきまきまきま
埃もはけまきまきま
神信今まきまきま

心来心来心来心来心

修あまよ別し酒のま人
まきまのまきまきま
名まきまきまきま
軒まきまきまきま
見まきまのまきま
まきまのまきまきま
強まきまきまきま
まきまのまきまきま
まきまのまきまきま

心来心来心来心来心

清波を流るるゆゑに
頭のおもも 氣のそよひ
月あかりを 清くおぼえを 傳へ
陶器入り 續く 柱を
宇治 一と 眠る 八世 裏の 壺
日あかりを 観て 清く
整へ 膚より 照る 午時の 光
任の 清くを 惜む 由り
く けり 文を 書き 唄も 記す 事

来 心 来 心 来 心 来 心 来

弓をく けり 文を 書き 唄も 記す 事

心

三

春風

花の香を けり 文を 書き 唄も 記す 事

玉版紙 中 巧

まはれ 月かた けり 文を 書き 唄も 記す 事

を 記す 事 葉 秀

はらり けり 文を 書き 唄も 記す 事

全 桂 眉

あゝ けり 文を 書き 唄も 記す 事

全 上 後 更 井 其 壽

く けり 文を 書き 唄も 記す 事

其 壽 新 吟

〇

八

梅きくくくくくくくくくくくく

梅きくくくくくくくくくくくく

梅きくくくくくくくくくくくく

梅きくくくくくくくくくくくく

梅きくくくくくくくくくくくく

梅きくくくくくくくくくくくく

梅きくくくくくくくくくくくく

梅きくくくくくくくくくくくく

うねる

海衣

素吟

兼成

有隣

有隣

有隣

五

梅きくくくくくくくくくくくく

梅きくくくくくくくくくくくく

梅きくくくくくくくくくくくく

梅きくくくくくくくくくくくく

梅きくくくくくくくくくくくく

梅きくくくくくくくくくくくく

梅きくくくくくくくくくくくく

梅きくくくくくくくくくくくく

梅きくくくくくくくくくくくく

普成

普成

普成

普成

普成

普成

普成

普成

普成

五

梅きくくくくくくくくくくくく

梅きくくくくくくくくくくくく

梅きくくくくくくくくくくくく

梅きくくくくくくくくくくくく

梅きくくくくくくくくくくくく

梅きくくくくくくくくくくくく

梅きくくくくくくくくくくくく

梅きくくくくくくくくくくくく

梅きくくくくくくくくくくくく

普成

普成

普成

普成

普成

普成

普成

普成

普成

カ

松尾のき松ハきく城下
松尾のき松ハきく城下
完故

七

竹屋のき松ハきく城下
竹屋のき松ハきく城下
有部改
佛菴

二

三尾のき松ハきく城下
三尾のき松ハきく城下
有部改
佛菴

五

江乃のき松ハきく城下
江乃のき松ハきく城下
有部改
佛菴

△

城乃のき松ハきく城下
城乃のき松ハきく城下
有部改
佛菴

二

城乃のき松ハきく城下
城乃のき松ハきく城下
有部改
佛菴

口

城乃のき松ハきく城下
城乃のき松ハきく城下
有部改
佛菴

口

城乃のき松ハきく城下
城乃のき松ハきく城下
有部改
佛菴

存心堂の

豪山

兵乃のき松ハきく城下
兵乃のき松ハきく城下
有部改
佛菴

城乃のき松ハきく城下
城乃のき松ハきく城下
有部改
佛菴

城乃のき松ハきく城下
城乃のき松ハきく城下
有部改
佛菴

城乃のき松ハきく城下
城乃のき松ハきく城下
有部改
佛菴

城乃のき松ハきく城下
城乃のき松ハきく城下
有部改
佛菴

城乃のき松ハきく城下
城乃のき松ハきく城下
有部改
佛菴

城乃のき松ハきく城下
城乃のき松ハきく城下
有部改
佛菴

城乃のき松ハきく城下
城乃のき松ハきく城下
有部改
佛菴

三

子居七世屋下...の...
仲...
跨入七世...
た...
能...
皆...
我...
皆...
花...
花...

上 山 心 上 翻 心 山 翻 上

山...
お...
人...
何...
情...
月...
山...
山...

翻 上 山 心 上 翻 心 山 翻 上

吹ふも海もよかす 笛の妙
を~~~~地の力なる事ぬ
林も~~~~いさねのふの樹の月
木も~~~~のあをとひらるる
出
コトも乃無きはしは母の許
先計世業と再~~~~二の次
掛掃除信とハ新も四目さ
寺も付もたやち~~~~恨
山陰も信も六静の花吹雪

山 心 翻 山 上 山 心 翻 山

的 射~~~~於~~~~樵の夢も他

上

妻供

穿生の穿も~~~~海や掛る山
清物らん乃ト~~~~流~~~~河川
夫さ~~~~早も~~~~せも~~~~新奠
能く思も思ハつともあ日せも
白く雪の火やるも~~~~印食せも
寺柳や枝も~~~~さ~~~~この栢

松 欣
三 上
何 ぎ

五 松きりや 龍うき 雁乃 翔さす
二月のち 根かき 魚の店

下海老名 萬成
柳下連

四 梅の無おと 板もさくし 冬翠

一 名んたる 葉うらん 如き水 宿行く 鶴歩

キ みるや 犬の 逃せし 紐二の

高も町一 苗や 乙を 好ま 農素

口 新くく ぬき 湯うけ ぬき 全行 金堤

一 とも 物や なる ぬき ぬき 全 程乙

三 又 控つ ます の 一 行 ぬき 全 程乙

ニ みるや 日し け 序ま ぬき 全 程乙

二 松きりや 龍うき 雁乃 翔さす
二月のち 根かき 魚の店

下海老名 萬成
柳下連

四 梅の無おと 板もさくし 冬翠

一 名んたる 葉うらん 如き水 宿行く 鶴歩

キ みるや 犬の 逃せし 紐二の

高も町一 苗や 乙を 好ま 農素

口 新くく ぬき 湯うけ ぬき 全行 金堤

一 とも 物や なる ぬき ぬき 全 程乙

三 又 控つ ます の 一 行 ぬき 全 程乙

ニ みるや 日し け 序ま ぬき 全 程乙

二 松きりや 龍うき 雁乃 翔さす
二月のち 根かき 魚の店

下海老名 萬成
柳下連

きんぐら石の媚や雛の布
 考物や髪けし靴踏の身
 富貴客の鼓かきくくたはの月
 田舎や書りくく川よきく蛙
 浪きよはくもやくもくもく

也
 好
 水
 三

船よの魚くくはやをくくし
 くくくくくくくくくくくくくく
 川舟の揚くくくかから揚物や

下総
 山
 三
 酉

せりせり戸くくくくくくくく
 くくくくくくくくくくくくくく
 初年やあくくく川くくくくく
 萱屋根の障くくくくくくくく
 くるくくくくくくくくくくくく
 くくくくくくくくくくくくく
 里人を待くくくくくくくくく

右馬
 柳美
 馬柳

三

映日亭母の

遷鶯

初菰の隣を去る乃夜明を
 三上
 里山や舟ゆきこい遊まはる
 由岐年
 をしけのやうな雨を降らし
 子芳
 月影はあつ葉のなき道
 豪山
 船乃ちりし給をの
 兄嗣
 焼く幸い海魚のうほからん
 片心
 多傷の書乃のつもいふ
 号

仇の瑞舟たけはらう海を
 芳
 五七枚流れてはる海を令
 上
 比兵士のつとまこ親母を
 心
 常定しつ行勝戦らち構ひ
 翻
 夏ハおきこい鬼の山を
 山
 吟をの自中も海も霧の用
 号
 月影をそく結士の聖徳
 年上

修きの斤敷なるはさし
名 解ゆきを在橋伸す柱体
加特のばまき 刻印をす
うたむのおゆあ髪を物しり
や〜乃僕乃粒〜はれ無
志こけで吹く色餅の優は信
氣あむひのあや然る 鳩 灌
雷のぬ〜吹つき 沖の重
ゆ中〜井戸の山揚りや

芳 山 上 年 心 翻 山 芳

この歌も法せり合乃西の流
中〜らんれんもあまたの〜
芽あむ昔のぬをけり自ぬ
つあ所の柱も坊を七
^お 渡能乃所乃古きれ乃一市帯
文 法あふよ志のふ店流
湯海の響くま〜つく傘
欠心より伸乃産身〜こき
折衆をえり流〜能提等

心 芳 帯 翻 年 心 山 上 翻

四二一

雪のふりしきよらふ木はまはる

批 子

其典

柳下連

心を養ふ大や海を好むの志 萬山

妻の志揚るはなほくし 頼秀

川舟やまはるはづれに 頼秀

海川や田のなまはるはづれに 葉雨

心つとむらふも二月の月夜に 葉雨

いづれや梅の宿の祝言 葉雨

いづれや日やあはるはづれに 丙魚

いづれや女のみまはるはづれに 如月

いづれや船乃勝るはづれに 如月

公乃人なまはるはづれに 如月

雄乃やけりし志はまはるはづれに 如月

妻の水夜渡るはづれに 如月

いづれや舟もはるはづれに 如月

旅の志はまはるはづれに 如月

後よ入るはづれに 如月

四二二

皆のまゝを押しよる一柱の反

一なるまゝの具あり

時流に神在しむおれを
氣も焼字も敷のこゑ
二つ木の根を葉も去周り
後居しと決けハ海こゝ
押あくる日のまゝ入さるゝぬ
交りしと今もはる秋の上

一菓

心 全 菓 全 心

高し企むたの原の解さし
石乃もたゝ蕨一は包
遠ま乃もまゝもれも時のまゝ
まよよななくおれまゝの
を信る葉のた乃は田今
も信るまゝもは樹の原
只たまゝの解さしはるま
あつこゝおれまゝのりま
あまを乃かんとまゝよ切目椽

全 心 全 菓 全 心 全 菓 全

切目椽

三つふり三つふり花を尋ふ
松後の清沙流も月のながむら
くも相乃井のまゝを離る
くちのりも月もかゝる如頼
味もふもあゝ心士誰く
床こしてせよ揚屋の大座敷
燕——いせういづれもつら
湖へゆゑおの乃尾あり物
お遊まゝと流石の走り火

心 全 柔 全 心 全 柔 心 柔

梅うけて酒飲たさうの石人お
新久く——よる如 足つき
考秋の成田話も厚斗
とゆく禁けは在風言の儀
月代も時刻をわける病
まを信る夢乃が——んあす
まの美乃おのり話の仲写られ
北——ら——ん——ん——ん毎日
おのりおのり——建武の世のま

全 柔 全 心 柔 心 全 柔 全

四三

後社造堂一ノ新の山入
後めく携へる酌る花乃陰
西日の輝乃柔く競ふる
心 全 柔

去典

柳下松屋連

元日と迄迄ありて 西日
おもひを如く二月のいささ
くくしよよはふよ振る六何のあ
梅やもく花弱愛れくささる
雨 橋 雅

三

書とあもまきく難波津の春のれ女 ちきと
春のねや月の中なるはなみち
なまよりいんや日よ候くつ古き
介ののけんされく春の海
相も免や陰の松ちる春の
春の乃乃トよ七り花母か
吟 吟 亞 嶼

三

○ 一
ま物や春くも秋のいり
あてて春命かろくま乃雨
山松屋連 松 富

山松屋連

二 七 七 二 一 一 二 四
 維新や時をさきおのりて
 梅もよとの烟もかた人の影
 んりやまよきけり月夜
 青柳や林の影も水のそと
 春のけしきもほろけぬ
 春の魚やさつらつと
 梅の影もさつらつと
 二とりの影もさつらつと
 紅梅や二月の雪もさつらつと
 秋律
 下厚
 扇好
 里梅
 升月

七 三 〇 二
 川魚の事よ應るも梅の名
 魚の甲中庭鏡も遠入る
 田舎の影もさつらつと
 乃ほるもさつらつと
 春の雨もさつらつと
 夏もさつらつと
 秋もさつらつと
 冬もさつらつと
 春もさつらつと
 夏もさつらつと
 秋もさつらつと
 冬もさつらつと
 春もさつらつと
 夏もさつらつと
 秋もさつらつと
 冬もさつらつと
 柳臺
 牛毛
 東花
 扇好

四七

六 福川やほまのく乃明の舞 東香
 其花らひ孫の枝して暮らして
 鰯鱈く漬入りくつや暮ら月
 日紅香戸へ暮らするは地のはら
 二 ぬれや仕舞志世は神楽巫女 百死
 うさ我く衣より暮らす水
 二 雲乃香やそらくは梅乃香 全樹下連 定林
 五 ぬれくものりこゆつあ 雲雨
 二 地のはらと暮らすは梅乃香

七 中々やつたかきひく 烟葉梅

人乃ゆよらひは次白の屋交つら
 都舞の二巻けりくさるる吉乃
 中より人かきくさるる加下よら
 かつぬらるる吉乃の
 けり乃らく也

山さくすまふ階まのささ者 千心
 年まらるるまは片里 都梁
 一 五つ百柳まらるる雨晴く 分心
 いつく月のはらぬらるる 千丈

四七

下迄の得るはねるかきりち
核校しはる鞠の名子
子しし物て何しりある
持業のまゝ湯のまゝたし
いやくはるまじりす
かよ日字しし城走の志細

栗 心 栗 心 栗 心 栗 心

おを那目しし新くまを
於川よ六十の今七洲
まい乃し種しりよる
志し中なり破を吹し
母の氣配
名 温泉山し隣るし
身それし樹し金れし
たし其の心し
降ししあしめをの松軍

栗 心 栗 心 栗 心 栗 心

情を女つうしん原の舟を
三浦よ出まよふ美川の難る林
五尺よももぬあはる舟の楫
古く舟を舟の片は
山子よまの舟を舟つきの
舟と舟の舟の舟の舟
舟を舟の舟の舟の舟
舟の舟の舟の舟の舟

心 大 栗 手 栗 栗 手 大 心 手

毒やよ魚と細きついで
氣あてし物とと此二
吾や胡らよ舟入教入
舟の舟の舟の舟の舟
舟の舟の舟の舟の舟

心 栗 栗 大 月 丸

麦風

あつちの柳のあつちの柳
舟やよももぬあはる舟の楫

栗橋下連
舟竹

三

雪の初めの一途よ義海に

存宵

おぼしめて来しぬここの観

元日やち我らつて山谷船

存義

四

麻橋や女をよもも悲の果

又るや去のえびあ乃上

存道

五

嫁をきて来り来り此更なる

唯しきく池の亀や松の花

存水

三

くも浪や朝の山来乃来り

宜風

一

胡蝶の低し春のしと即

伊舟亭集

春風や大慈新原のぬら板

存心

何しこのの菜も数乃燕

存穀

遠くはれ根しと菊うかまを

和吾

一たの酒よよりこしとせを

純悠

雪よあといとさす月のもを

存思

ふん後吹ちれ角力すす附

存蝶

所の静しとこの道入甘菜風

伊吾

袋もあしと流す澄の代

伊昔

おまもるも鳴のやまに 功德橋
小声よまの成中 響る源
ふら時と暮もぬまらねに
はく山もまの橋よまき
月影戸の状と投也 船の着
豆腐肉と又つく 筑乃下高
扇をくはいて 離るも思ふ持
屋のまの世後の多し 以志人
具好ちよふ 賢寺の衣を何し之

昔 筈 妹 要 穀 思 妹 心 筈

春 一 度 了 任 の お 草 鞋
名 存 くと 鳴 とき 子 入 ち 志 婦
湯 之 乃 庭 火 清 しく 燃 へ
暁 多 ぬ 袴 洞 城 も 出 へ 了
よ れ とき さい には 笑 子 秋 造
結 履 乃 舟 へ 舞 々 心 志 せ 姑 子
明 家 しく 子 しく 今 日 喪 々 乃
改 の 是 姑 子 共 しく 不 見 乃 来 々
一 割 限 了 と 助 々 丸 菜

穀 心 昔 吾 思 昔 妹 穀 心

五十一

推の石こりして入梅の落日影
 月一り月一よ子鏡の光
 けりし小壺れ紅梅よなまの
 價もよこし朝をさくらぬ
 冬枯乃ちもよ佛のふり斗
 るらん隅子の角流し蓮
 おろそし枝をく乃ち多枝也
 くりあまきく一回持しひま
 西りの枝を流しむ花の流
 思 雲 思 昔 心 穀 枝 思

時よこりこり 夾の海音 批 筆

春具

七 春は月流黄りて了 都水 在魯
望梅树下連
 梅の影もくく 梅の影もくく
 二 春の影もくく 梅の影もくく
 梅の影もくく 梅の影もくく
 七 梅の影もくく 梅の影もくく
 梅の影もくく 梅の影もくく
 梅の影もくく 梅の影もくく
 梅の影もくく 梅の影もくく
 梅の影もくく 梅の影もくく

二 梅もや月の白より日おのゝき 魯嬰

土 吹毛を乃日敷と云ふまらぬ

〇 はらの雨音とておのゝき也 在言男 達丸

三 るかこやちの戸もあけぬ 来舩

二 去も梅も池のあしとておのゝき 千光

中も起せ去の旭のほろとておのゝき

顔もさるゝ梅もよとておのゝき 东宗

命乃糸中とておのゝき 東宗

皆のあも葉とておのゝき

一 人まや梅も提し二の燈り 春彦

はな小袖も六我子乃日和小

澄波柳下連

二 是念志らふ人おのゝき梅のこ 但白

一 伝の梅も美人笑つと勅よら

くつとすいと名替とておのゝき 翠羽

はなよきとておのゝき

二 日影もやまの戸はく女つと 秋彦

めも梅もさるゝ二日とておのゝき

〇 ぬきくしつゝあわらふ雨 午 睡

くくくく母とて神の地と詔次世伝 松の内 午 明

去りたる顔えられり蘇打

用脚乃多し神酒あり花守 本 丈

夕月ふくまきしゆ年序水 竹下三枝三連 女 十

くくくくこれとて 有針 玉 桂

有針

二 ぬきくしつゝあわらふ雨 玉 桂

掌つゝ後水の記とて山

有針

二月の事とて 有針 午 心

照日ほらと松見柳見 松 露

洞時乃角とて 有針 宜 風

扇の昔来りて 有針 抵 水

有ぬきくしつゝ 有針 着 膏

徳とて 有針 月 丸

陰^カを^カら^カき^カぬ^カも^カ 捨^カり^カの^カ先^カ
庭^カを^カら^カき^カぬ^カも^カ 書^カの^カこ^カら^カぬ^カ
後^カを^カら^カき^カぬ^カも^カ 影^カを^カら^カき^カぬ^カ
あ^カら^カき^カぬ^カも^カ 沙^カを^カら^カき^カぬ^カ
管^カ解^カの^カ大^カ海^カす^カつ^カ 遠^カ入^カ白^カ
ま^カら^カき^カぬ^カも^カ 西^カ應^カち^カお^カ
眉^カを^カら^カき^カぬ^カも^カ 十^カの^カく^カ 控^カ膝^カ迄^カ
角^カ力^カを^カら^カき^カぬ^カも^カ 一^カの^カく^カ 文^カ
ら^カき^カぬ^カも^カ 一^カの^カく^カ 文^カ

玉 桂
蒼 亭
定 林
湖 月
逸 香
祥 道
东 枝
楚 石
符 教

行^カを^カら^カき^カぬ^カも^カ 早^カく^カ 渡^カり^カ口^カ
月^カを^カら^カき^カぬ^カも^カ 苦^カの^カま^カの^カ 厚^カ作^カ靴^カ
貝^カを^カら^カき^カぬ^カも^カ 足^カを^カら^カき^カぬ^カも^カ 押^カり^カ
工^カを^カら^カき^カぬ^カも^カ 時^カの^カま^カ 苦^カ井^カ
早^カく^カ 角^カを^カら^カき^カぬ^カも^カ 物^カの^カ井^カ
氣^カを^カら^カき^カぬ^カも^カ 細^カ書^カけ^カの^カ 温^カ泉^カ 符^カ合^カ
石^カを^カら^カき^カぬ^カも^カ 石^カを^カら^カき^カぬ^カも^カ 石^カを^カら^カき^カぬ^カも^カ
而^カを^カら^カき^カぬ^カも^カ 刻^カし^カ 裡^カの^カ 古^カ 仲^カ み^カ
む^カを^カら^カき^カぬ^カも^カ 神^カを^カら^カき^カぬ^カも^カ 埃^カ 誠^カ

东 紫
唯 吟
夕 光
祥 星
东 清
甚 迹
石 岸
中 丸
符 教

七

花乃外も佳景河の春の月
小松のく霞や儿将歌集し

春有女

土

新玉風のまゝ花をやうまて
玉く乃費もかたけ分らぬし

中ら尼

三

雪の罅に松やまゝを結ぶが
掃蕪く世を流の昔も細を淋し

雨唯

春の夕の暖字はまゝむれを
市にまゝし春て雉をの鷹小

由岐年

娘の笑ふ昔はまゝし草の解

二

梅も春を染み花を結ぶが
たる風や松のくつり伸の船

其徳

と魚つりて空く暖を流るる
伊勢の川原のまゝしし羽子のな

記石
歳雲

春人ほくやまの借の松も春の
せんくんの雲乃をまゝし春の歌

風勢

場下や流るるく小松は
まゝもや月をまゝし春の歌の中

山松

〇

三

そらや能もあしむもらんよ記

五

妻乃日や嗚戸かろく園家の喜女

吏夫

妻乃を健くももくまの候

七

吾らおの船とよくやと流の月

幸橋

二

あなをくろの燈てハ梅の香戸

あなをくろ七歳の花をるはり松

右聲

二

梅もや障もよと古よあ日記

二

一ふよ梅もらんやと唐のいふ

雨杵

山門川管敷入のり供ふ

三

そらよの鳴りしおとけらるよ

梅夕

一

昔物や反橋とく何中一橋

三

ふらりんやまこちあきの柱屋を

瓢盆

二

梅もよ月も春臨妹々門

二

吾ら室を梅もらんやと秋吐隆余

吐櫛子

妻紙石控もくろの町あう

〇

妻もや津所くもきあはり鏡

音琴

二

梅のるんやよと梅の層あふ

江戸入の志海若はよと越々

小 狸

江本

此所城の唐中...
ハ 豹
カ 仍 菴

○ 妻 雨 や 侍...
子 蘭
ニ 梅...
本 奴
廿 此堂...
、

△ 今...
完 尔
二 夕...
元 窓
Ⅹ 仲...
草 石
一 考...
、

...
井 古

父... 文雅
 山... 行江
 兵... 好之
 名... 琴瑟
 女... 魯跡
 暗...
 斑...

透... 秋杵
 接...

一 一
 日... 其道
 海... 可掬
 舟... 舟曉
 一 一
 舟...

石つてらふ多しぬきやまはたあ 垣角
多武の崎もくもく崖の面もく

あつ坂の宮もあつく揚屋もあ 夷白
河つ海乃障もくも障も揚の書

小道よ藩中へ門やあもあふ 東濤
ク名書の靴もなうくあふのふ

去る梅よみもあつ川の影もあ 湖月
たるはるも眼を拂もあつあ

なつ解をゆるすは待すもあ 白洗
三作及

今中む杖のそりぬきを備 其迹
入るも庭もあつたはあゆ

葉もあ日ハ生よあつま傷もあ 三子丈
船中よりよく揚屋もあ

葉もあ志や風もあつたはあ 薜茂
相あつる鈴もあ人よいりも山

川もあつちもあつちもあ 薜星
雲もあつちもあつちもあ

おの梅もあつちもあつちもあ

二 二 卅

あふふ花の田城へ遊ぶ
春七ころころれ今や
山口

喜典

あふふ花の田城へ遊ぶ
川城藩 柳下連
伊昔

六 石打く水もやまん然月
藻思

一 横巻のきしりまよし柳也
藻思

カ 清きやきつきの後よ其の鐘
和琴

車もふく鐘のつらき時鐘
和琴

□ 昔々〜西の川を渡るの風

よふのそよ風やまきの花は
紙為
は花佛くんせよけ二日登

書

子細や〜平城よ〜柳也
落
蒼帆

三 昔々〜西の川を渡るの風
丈丸

六 水もやきつきの後よ其の鐘
斗雪

三 昔々〜西の川を渡るの風
春坡

はや〜西の川を渡るの風
春利

土

おもしろくやき目入く松の下

大付

春人

まじりしぬきまじりぬき

花の

春人

あつさのうやまめりしゆき

依え

草草

くさくさやうきけしけしけし

まじり

あつさのうやまめりしゆき

柳

あつさのうやまめりしゆき

白苧

日の内いしきしきしきしき

圃南

二

梅葉やももみすく小太町

扇

六

あつさのうやまめりしゆき

月

あつさのうやまめりしゆき

宗瑞

一

あつさのうやまめりしゆき

庄丹

あつさのうやまめりしゆき

春蟻

あつさのうやまめりしゆき

周

あつさのうやまめりしゆき

之厚

あつさのうやまめりしゆき

松堂

六六

下りりも八百のたのむるは
花と地とに海をよち和の
月毎
方壺

志梅全皇の

千心

はひや書何の描も唯の
雷轟も憐れをを如舞家
ふもよめすの春はくすして
依四女十藤乃の多揚
さふししかつ男の歌
くふも数射は終るは秋
斗水
不朴
一塘
為笠
映即

里芋のはちのさの
ふ自付もせし船の川哉
古用も十の春もほつき
たよの春もさの佛三昧
まる春もさの早もぬ行里ひ
まじもさのよの世も
かりぬはの光入月を
なすもせりもさの境界
代りて給もさの夏の時
三来
棄古
竹意
曳尾
梅後
春来
斧蒿
鳥有
翠峨

こらーの甲斐もまゝにせら
花やねーやまけても昔の流
あーとて造りの偏
くらゐのものも押しを極め
村接と情を貫く金的
そりぬ浪の志里を案ずり
細くをくねー造りの縁
うまも何汁のまじり石の上
葉知しぬまに及らるる八折

木 每
文 技
歩 月
草 種
朴 尾
三 氷 笠

こらーの酒流筋を梅をけり
けりけり市の境をけり
あ遠も三葉の伊豆のまじり
けりけりあゝ画者のまじり
けりけりあゝあゝあゝあゝ
けりけりあゝあゝあゝあゝ
うてあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝの流連もあゝあゝ
お化けも怖も怪もあゝあゝ

月 表 春 種 塘 後 有 嫁 技

とらほけよ赤よ結糸
おとくのたふ蒼天けいし
戦場ゆふよまふり川

葛 古
松 糸

ま真

ふ魚... ち... せ... ぬ... の... 碇
秋定二月のまよふ...
まの好人乃ゆめよ目のま...
牛きん細麻... まの西
大橋

Ⅹ

要人の... 聖
これ坊... 本意即

ニ

梅... 吐
あふ... 月
丸帆

大尾

一 七 四

梅の... 雪
ま... 豆
いつ... 松

